

タガ 日本の「箍」の緩みの考察

金沢工業大学客員教授

(株)人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

日本文化の基底の上に乗ったモノについて(5)

—日本人は、もっと日本文化の拡がりとお興行きを本質的に学び、

日本に自信を持ち、世界と渡りあおう!—

はじめに

(1)から(4)において、日本文化の基底の形成に関して、村落での定着生活の下での水田稲作農業生活がそのベースとして機能していた事を明らかにしてきた。今回はもう少し、今日の日本文化の基底の形成の上に乗った幾つかの本質的事柄に触れておきたい。

その一つは「禅」の導入であり、もう一つは「武士道」の形成である。この両者はその内容においても、形成の過程においても、基底深い内的関連を有している。そして明治維新の西洋科学技術文明の導入と第二次大戦後のアメリカ的生活様式である。果たして、どこまで日本文化の基底を変化せしめているのだろうか？

禅の導入

坐禅が日本に入ってきたのは、鎌倉時代と言われるが、それにはその

時代に入る前から、その導入を欲する社会環境が存在していたと考えられるのが妥当であろう。明らかに平安時代の末期に、「平家、源氏」の武士階級の支配する時代が登場し、そして鎌倉時代に入り、完全に武士階級が支配する時代に入った。その当時の貴族階級、あるいは一般庶民の精神的悩みは一体どのようなものであったか？そして、その解決の為に、どのような思想があり、どのようにその役割を果たしたのであるか？それをまず考えてみよう。

時代的には、平安時代(794～1192)は大きく分けて、3期に分けられる。

- I 平安京と天皇親政…桓武天皇
- II 摂関家と国風文化…藤原道長
- III 院政の武士(源平)…

平清盛 源頼朝 家頼

この平安期の中から末期にかけて、社会は大きく乱れ、荘園貴族間

の激しい攻め合いが生じ、各々が自警団的組織を持ち、それらが世襲化し、何代か続く内に「武家」という家柄が社会的に定着し、徐々に一つの独立勢力となっていた。

そしてそこには藤原家以外は、出世出来ない貴族社会の抑圧された構図と、武士社会の形成という二つの大きな社会的勢力の葛藤、軋轢とそこでの悩みを救済する策とが強く求められる状況があった。同時に多くの内紛や戦いは、多くの農民達をはじめ一般の人々にも、心の静けさを求めたものと考えられる。

明らかに貴族達は心の安寧には、外への権力を求めるよりも、内向きに自己の完成に向かうエネルギーを強める傾向が強まっていた。そこでは何よりも、そうした精神の動きを支える芸術、文学や宗教が求められることになる。その一つとして禅宗的なものの希求が生まれたのである。他方武士階級の方も、徐々に死

を社会的に感じる展開を迎え、主従との関係、あるいは一族への忠誠等様々に自らの心を静かな状態にするべく、あるいは死に対しての心構えを鍛錬していく上で、宗教の助けが必要とされた。そうした状況に巧みに人々の心を捉えたのが「禪宗」であつたと言えよう。

その「禪宗」の内容について少し触れてみよう。

師衆に示した如く
「善知識は何をか名付けて坐禅するや、比の法門中は無障無碍なり、
外に一切の善惡の境界において、心念が起こらざるを名付けて、座をなし、
内に自性を見て乱れざるを禅とす。
外に相を離れば禅となし、内に乱れざるを定となす。
外に苦しき相著すれば、内に心に即ち乱れ、
外にもし相を離れば、心即ち動かず、本性は自浄、自定なり
『六祖壇經 坐禅第五』

そして、元々禅は中国において生まれ、6世紀前半に達磨が中国に伝

え発展し、更に日本に入ってきた。特に、臨済宗、栄西の伝えた禪宗は、「公案」を主体とし、道元の伝えた曹洞宗では『保証一如 只管打座』を唱え、壁に向かって座禅修行をする。どちらかがとえば、公案（権力を持つ者）には臨済宗が、武家には曹洞宗が好まれたようである。坐禅という言葉の定義は、前述の如くであるが、少し図示してみると、図1のようになる。

らゆる社会階層に強かったのであろう。そうでないと不安で生きていく事が苦しくなったのであろう。さてそうした内発的ニーズは良いとしても、もう少し外周的に禪宗が日本の中に入り、発達を遂げた事に關して見ていこう。

禪宗：座禅をする宗派		
全ての人には、内面には仏性があり、それを再発見する為に修行を行うインドで始まった禅を、六世紀の前半に、達磨が中国へ伝えて発展 日本では、鎌倉時代の初期に栄西、道元、江戸時代に陰元が伝え、発展		
臨済宗	曹洞宗	黄檗宗
栄西禅師	永平寺の道元禅師 総持寺の瑩山禅師	陰元禅師 京都 萬福寺
お祖師様の言葉、行状 『公案』	『保証一如 只管打座』 (悟りと修行は同一のもの)	浄土は西方に在るのではなく、自分の中に在る
看話禅 公案を考えながら座る	黙照禅 心を無にして黙々と座る	念仏禅 禅と浄土思想の合致
通路（対面）の方を向いて座る	壁の方を向いて座る	
建仁寺派 南禅寺派 妙心寺派 仏通寺派（広島） その他十四派	永平寺 } 二つの大本山 総持寺 } 約一万五千ヶ寺 僧侶 二万人 一千万檀信徒	普茶料理、煎茶等の文化 木魚は黄檗宗と共に普及

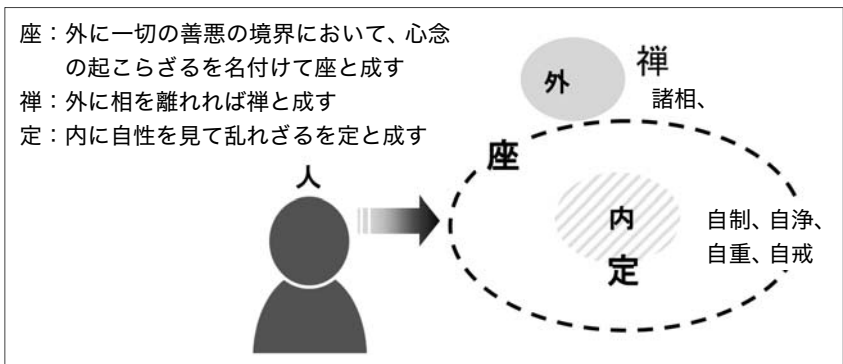


図1 坐禅定の定義

武士道の発達

今日の「武士道」という言葉は江戸時代に確立したイメージが強い。しかし平安時代に誕生した「武家」、あるいは「武士階級」には、公家や一

般大衆とは異なる思想、あるいは考え方が未分化であれ、何らかの原始的な形であれ、徐々に原型的なものが萌芽として出来ていた筈である。何よりも「武士」という存在は、常に生命を賭した戦いと密接不可分

であり、自らの生命と相対する相手の生命とを考慮するを得ない立場に置かれていた訳であり、かつ集団においては、階級の総体的容認が不可欠であり、常に根本的倫理感を持つて自分を社会の中で律し修行し「いざ鎌倉へ」の為に準備と心構えをしなければならなかった。その為には、江戸時代の武士達レベルに確立しなくても、原初的な武士にとつての「道」が求められたに違いないのである。

そして鎌倉時代の武士の規範を描いた『貞永式目』の中には、五十二条の冒頭に、「三ヶ条に「社寺尊重」、「祭祀」、「仏事の奨励」とあり、武士道教育に宗教とを活用していた事が判る。そして、「武士道」は江戸時代に完成したと言われるが、その内容は次の七つのキーワードで表現される。

図の7つの内容は、深く仏教、神道、儒教の教えと関係している。儒教が入ってきたのは江戸時代に近い

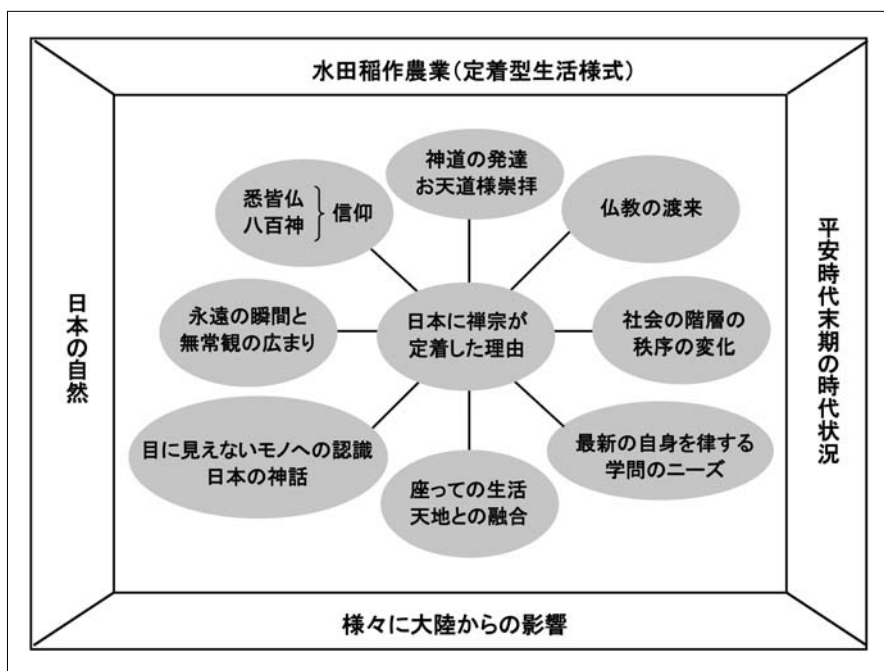
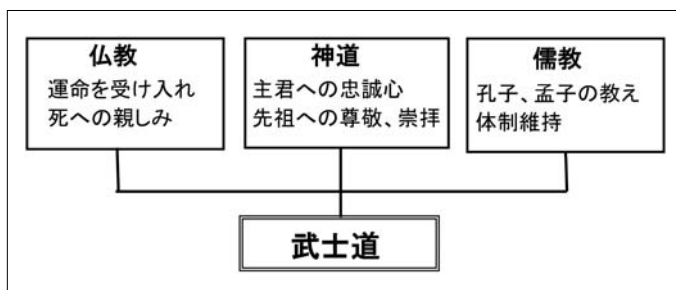


図2 日本に禅宗が定着した理由

七つの『武士道』の内容：道德

義	人としての道 義を通す 安心の掟
勇	義を貫く勇氣「匹夫の勇」と「大勇」
仁	人としての思いやり 他者への憐みの心
礼	他者への気持ち(やさしさ)を尊重から生まれる謙虚な心
誠	言ったことを成す「武士に二言はなし」(武士にとって、嘘やごまかしは臆病な行為)
名誉	自分に恥じない高潔な生き方を守る 羞恥心
忠義	武士最大の徳目 主君、組織、国家、個人、家族への奉仕、最高の名誉



時代である。この観点からも今日誇る『武士道』は江戸時代に入ってから

の形成と言わねばならない。何よりも先祖への尊敬、崇拜は家を守る事でもあり、同時に天皇を守り、天皇を守る公家、武家を守る事でもあった。まさに主君への忠義であり、その為に自分が恥じない生き方を心掛けた。その為に、常に「正義」、「大義」を求め、自らの生命をかける事に揺らぐことなく、かつ人を慈しみ、尊敬する為に自らが礼を尽くすべく従者となり、「武士に二言はない」の如く「誠」を尽くしたのであった。

こうした考え方は、鎌倉時代から完璧に出来上がった訳では無い事は『武士道』についての専門書を見れば明らかである。

武士を“もののふ”との呼称するが、これは当時の建國統一に物部氏は朝廷へ「武」を持って使える事に由来があると言われている

しかし少なくとも平安時代中期以降に徐々に自警団から、一つの階級に特化して武家になっていく過程の中で徐々に、「原初的武士道」が

形成されつつあった事は疑いが無い。

ここでは、これ以上詳しく「禅」、「武士道」について触れるつもりはないが、日本文化の基底について考える時、定着型の水田稲作農業の中で培われたベースに、そうしたものが加えられて、今日の文化総体を形成していった事は明らかである。明らかに鈴木大拙師の『禅と日本文化』においても、日本人が心の安寧を求める中で、「無心」になり、大宇宙（マクロコスモス）の諸々の活動がミクロコスモスとして自分に共鳴をし、そこに主客の分離が統合され、何らかの安らぎが訪れる事を示しており、「まさに空をして、空を空の如く顧せず」という概念を伝えている。そうした神髄の部分に、日本の自然の持つ陰影、明暗のコントラスト、実に多種多様な線や形状、そして様々な気象や、季節折々の山川、草木の生命の躍動が、日本人の脳裡に捕捉され、実に豊饒な言葉を、そして「日本人の美意識、自然観、哲学、思想、情趣」を生み出し、奥深い文学、芸術を創作せしめたのである。

実際日本文化の多くは、当初、日本より先に発展していた大陸文化の影響を極めて強く受けていた。既に述べたように日本文化は、木村尚三郎氏が指摘し、当研究所が詳細に調べ、裏打ちしたように「男時 女時の交互到来」が観察されている。即ち、男時には、海外から様々なモノを導入し、それを女時で日本的なモノへ改良、発酵させていくパターンである。

明らかに鎌倉時代までは、アジア大陸からのモノが主体であり、仏教、儒教もそうであり、様々な政治、経済形態や建築、芸術等もそうであった。しかし注目すべきは、明治以前までは多くのモノを「男時」に輸入したが、それを日本的に改良、発酵させる「女時」の期間が「男時」よりも長かった事と、それらをより良いモノにするアイディアと技術とが日本社会に事前に培われていた事を正しく捉えておかねばならない。例えば製鉄の技術であった。

より良い鉄を生産出来る国が未だ、昔も今も「鉄器文明」の地球においては優秀なモノを生み出す一つの重要なポイントなのである。いずれにしても、禅も武士道も、定着型の水田稲作農業の中で、培われた人々の心の上に生まれたのであった。

